

# 博士論文審査報告書

## 論文題目

カレル・タイゲの一連の論稿に見る建築思想  
とチェコの建築の近代化過程

KAREL TEIGE'S ARCHITECTURAL  
PHILOSOPHY IN THE  
MODERNIZATION PROCESS IN CZECH  
ARCHITECTURE

申請者

岩澤

錠児

Joji

IWASAWA

建築学専攻 建築意匠論研究

2013年7月

本論文は、20世紀初頭のチェコの建築の近代化過程において思想的側面から重要な役割を果たしたとされる批評家カレル・タイゲ（1900 - 1951）について論じたものである。タイゲは1920年代から東西冷戦にいたる1950年代までのチェコの近代芸術運動の中で多くの言説とタイポグラフィ等の作品を残している代表的な人物であるが、その後の政治的状況下において、彼の名前は歴史から抹消されていた。しかし、東西冷戦後からその再評価が始まり、タイゲ研究は現在萌芽的な状況にある中で、本論はタイゲの建築思想の変遷とその枠組みを残された論稿から整理し、当時のチェコの社会情勢と照し合せた体系的な考察であり、その意味で機微を捉えた先駆的な研究と言える。著者は本論文の目的として当時のチェコの建築の近代化過程におけるタイゲの建築思想の変遷とその枠組みの一端を示すこととして控え目に述べているが、タイゲが残した多様な領域に渡る文献資料の中から、主に建築に関連する論稿を抽出し、それらの言説を新興国家であったチェコの近代建築史の編纂における彼の評価軸、および同時代のチェコの社会情勢に対応した建築思想の推移の二つの側面から整理し分析することで、社会主義思想に基づく建築論からシュルレアリスムへと展開される彼の特異な言説について詳細な考察を試みた本格的な論究と言える。加うるに、本論は20世紀前半の社会主義に基づく建築運動についての見直しの潮流を担う姿勢を持しつつ、タイゲおよびチェコ近代建築研究の深化をつうじて、ヨーロッパ近代建築史の枠組みに新しい知見を資するものでもあり、従来の東欧近代建築史研究とは峻別されるべきものと言える。

本論文は、序論、本論4章、結論の構成をとる。

序論では、タイゲの諸活動の概略、そして現代チェコの芸術文化への影響、さらに既往研究における位置づけと研究方法・目的について述べている。

本論第一章ではタイゲの言説とその時代背景の関係について取り上げ、19世紀におけるチェコの民族運動の機運を受けた国家的な独立から、大戦間の建築を含むアヴァンギャルド芸術運動の興隆、ナチス・ドイツの侵攻によるその終焉、そして第二次大戦後の親スターリニズムの政治体制へと移行する時代との連動性を明らかにすることで、タイゲの言説の時代の証言者としての性格を印している。

本論第二章では、タイゲの論稿の中から当時の新興国家であったチェコの近代建築史の編纂に関する彼の言説を整理し、時系列に沿ってチェコの建築の近代化過程に対するタイゲの評価軸を示している。すなわち、建築家ヨセフ・ジーテクの「国民劇場」を民族運動が高まる時代背景の中で、それをチ

エコにおける最初の国民的建築であるとして、チェコ近代建築史の起端に並置したこと、次にウィーンの影響とチェコ独自の文化の二つの流れの融合としてチェコの近代建築の系譜を国際的文脈と結びつけ、その体现者としてヤン・コチェラを位置づけ、さらにアドルフ・ロースの装飾論をマルキシズム経済論から読み直し、ロースを構成主義の預言者と措定しつつ、国際的な構成主義運動のチェコでの具現化をヤロミール・クレイツァルに託するといった、これらチェコの建築の近代化過程についてのタイゲの一連の言説は、当時のチェコの国内外の社会文化的状況と克明に照合したものであることを剔出したことは、従来のタイゲ研究および東欧近代建築史研究を特段に深めるものであり、高く評価できる。

本論第三章では、1930年代前半のタイゲの建築に関する一連の論稿を整理し、それらの言説をル・コルビュジェに関する一連の論稿と、彼の当時の建築思想の集大成といえる著作『最小限住居』に集約して、チェコ近代建築を取り巻く状況におけるタイゲの建築思想の一端を解明している。前者においては、ル・コルビュジェについての一連の論稿を本来の社会主義的視点から批判的に整理することで、1920年代後半から1930年代前半のタイゲの建築思想の中軸となる主題が編纂される過程を明らかにしている。タイゲはそこで取り上げた主題を後者の著作へと敷衍し、当時の住宅危機の背景に社会構造の問題を見だし、社会学的なアプローチを試みることで、歴史的な文脈を含む都市の問題に階級制度が複合的に関連する社会構造そのものの分析から取り組まなければならないこと、さらにそこから都市・建築における社会階級の問題を抽出し、最終的に女性の解放を目的とした先進的な建築論へと高めていったこととを引き出している。著者は、ここでのタイゲの建築論が、女性の解放の理念と実際の住宅計画の矛盾、当時の近代建築デザインと旧来の芸術性の矛盾、同じく当時の近代の都市計画が孕む金融資本的プログラムの矛盾への批判へと展開したもので、本来の社会主義的な視点から展望されたものであることを見抜いている。これらの一連の言説に見られる、当時のチェコの近代建築の実践の状況と対照しながら既存の近代建築の二重構造を批判し、当時の近代建築家が提唱する近代建築理念の同一性を解体していく道筋から、この時代のタイゲの建築思想の特質の一端を明らかにしたことで、20世紀前半の社会主義にもとづく建築論の再考察の潮流に対して新たな知見をもたらしたことは評価に値しよう。

本論第四章では、1930年代から晩年にあたる1940年代後半の言説を取り

扱い、この時期は本来的な社会主義リアリズムとは相違するスターリニズムの台頭とナチス・ドイツの出現という切迫する政治的な状況下において、タイゲがシュルレアリスム運動へと参与する時期に相当し、彼が自然と人間の生活を改めて見直すことで著した最後の建築論「自然と建築の序説」の言説を対象として分析している。タイゲが1932年のソビエト・パレスのコンペを契機とするスターリニズムに基づいた社会主義リアリズムの建築の台頭に対して明確に反対の意を表明し、そこから本来的な社会主義リアリズムの考えをシュルレアリスムへと架橋し、スターリニズムが台頭する状況に抗して活路を見出そうと試みた1930年代後半のタイゲの思想的な立脚点を浮き彫りにする。それら一連の言説を発展させて、第二次大戦直後の1947年に書かれた論稿「建築と自然の序説」においては、タイゲがシュルレアリスムと建築的なランドスケープを架橋することで、この二つの世界の連関による新たな建築論の可能性を提示し、それを絵画史的な観点から人間と自然と建築との関係を考察・補完して、そこからシュルレアリスムに基づくランドスケープ論へと体系づける彼の特異な建築思想をヨーロッパ近代建築史に位置付けたことは、当該分野の研究に資するものである。また、同論稿においてタイゲは人間と自然と建築の歴史的、思想的背景を総括し、人間と自然と建築の関係性を見直しを試みているが、彼の自然環境に対する先見的な思想を示すものであって、著者が現代における建築と自然環境の主題に対しての先取的姿勢と関連付けて整理していることは今日的に意義深いことと、言える。

結論では、上記の研究成果と、各章の考察結果の要約をもって本論文全体のまとめとしている。

以上を要するに、本論文はカレル・タイゲの残した建築に関する論稿における言説を体系的に整理し、ヨーロッパの近代建築史研究の枠組みのなかで、カレル・タイゲの建築思想とチェコの建築における近代化過程の関連性を詳細に明示した先駆的な試みであり、その成果は建築学の発展に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士（建築学）の学位論文として相応しいものと認める。

2013年6月

論文審査員

主査 早稲田大学教授 工学博士（早稲田大学） 入江正之

副査 早稲田大学教授 工学博士（早稲田大学） 中川武

副査 早稲田大学教授 古谷誠章